





























藤瀬：アーキテクチャがないとボトムアップの集合体になって、捨ててはまた作り直すということになりかねないので、アーキテクチャの構築はきちんとやってほしいという希望はあります。ただしアーキテクチャ自身の理解を進めるのもなかなか難しく、そこがネックというのが私の印象です。

吉野：システムの考えたときに、DXが上手くいったときというのは、既存のシステムとDXのシステムというのが別々に存在するわけではなくて、融合して、既存のオペレーションの中にDX的な要素が組み込まれていくというのがひとつの姿かなと思っています。Sier視点では、そうでないとビジネスが大きくなるので面白くないという感覚はあるのですが、今回、成功されている事例というのは、そういう形になっているのか、あるいは、DXはDXで、ある意味、既存のビジネスと離れたところでされているのか、その辺はどうでしょうか。

三部：両方のタイプがありましたね。今までと違う市場に出ているとか、そういう新しいサービスを始めようというような会社は、どちらかと言うと、今のシステムとはあまり関係しないようなものを新しく作って、独立してまわせるようにするというアプローチを取っています。今の市場の中でさらに付加価値を上げるためにデジタルを使うというようなタイプのトランスフォーメーションでは、やはり既存システムも、ある部分は変えながら取り込んで、デジタルを組み入れた新たなその業務プロセスを作り直してというアプローチです。

吉野：やはり企業の経営の方向性がどっちを向いているかによって、当然ながら、情報システムの構造も変わってくるということですね。

三部：そうですね。戦略として、新規のところに出て行って、そこに種を植えるんだという戦略を取るのか、今のビジネスに軸足を置いた上で、デジタルを使って一歩踏み出すことを狙っているのかで変わってくるのかなと思います。

吉野：話は尽きないですが、そろそろ時間となりました。DXを推進する上で大変参考になるお話を聞けたと思います。境さま、三部さまどうもありがとうございました。

#### 脚注

☆1 2020年3月の本会全国大会でのデジタルプラクティスライブ「DXを推進する俊敏なシステム開発・運用—アジャイルにつなぐビジネスとICT」

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-5 化学会館4F  
一般社団法人情報処理学会 <https://www.ipsj.or.jp>

All Rights Reserved, Copyright (C)  
Information Processing Society of Japan